

教員の学び合いによる授業改善

－ きのくにeラーニング活用FC研修講座 及びカリキュラム開発推進事業から －

研究開発課

【要旨】 児童・生徒の学力向上を図るため、教員の指導力向上が求められている。和歌山県教育センター学びの丘（以下「当センター学びの丘」と記す）では、教科指導上の課題解決のために校種間連携等を通して、地域の教員が互いに学び合い、教育力や指導力の向上を目指す「きのくにeラーニング活用FC（フランチャイズ）研修講座」を実施した。

また、当センター学びの丘に設置された先進的な施設・設備を活用して、児童・生徒に興味関心を呼び起こし、確かな学力を育成するため、発展的な学習のカリキュラムの研究開発を行う「カリキュラム開発推進事業」を実施した。

本稿では、これら新たな教員研修等、当センター学びの丘がもつカリキュラムセンター機能における取組について、内容を紹介するとともに、得られた成果と課題について考察する。

【キーワード】 カリキュラムセンター機能、きのくにeラーニングシステム、教員の指導力向上、FC研修、カリキュラム開発、教員の学び合い、校種間連携

1 はじめに

当教育センター学びの丘では、学習モデルの開発をはじめとして教育活動への多面的支援を行うために、カリキュラムセンター機能の充実を図っている。具体的には、各学校の課題に対応したカリキュラム開発支援や授業改善に係る研究グループの支援の他、きのくにeラーニングシステムを活用した教員相互による学び合いの支援を行っている。

当センター学びの丘では、平成14～16年度実施の「e-Learning 創造事業」により、教員がOJT（on the job training）を行う新しい教員研修の形を提案した。平成17年度には、きのくにeラーニングシステムを活用した授業づくりに係る「学習システム活用研修講座」を実施した。この教員研修では、県内各地から集まった教員が校種や教科ごとにグループを編制して授業づくりを行った。

平成18年度には、地域課題解決型の教員研修として「きのくにeラーニング活用FC（フランチャイズ）研修講座」を設定した。ここでは、近隣地域の教員が校種間連携等を通して互いに学び合い、教科指導上の課題解決を行うことで教育力や指導力の向上を目指した。また、平成17、18年度には、カリキュラム開発推進事業を起し、当センター学びの丘に設置された先進的な施設・設備を活用して、児童・生徒の興味関心を呼び起こし、確かな学力を育成するため、発展的な学習のカリキュラム開発及び研究授業の実施による学習モデルの提案を行った。

これらの取組の概要を述べるとともに、成果と課題について考察する。

2 きのくに e ラーニング活用 F C 研修講座

本研修講座は、市町村内及び周辺地域の小・中学校教員及び中学校・高等学校の教員でグループを構成し、受講者が教科及び単元等のテーマを設定し、授業改善に向けて授業研究を行うものである。本年度は、紀北地域では、橋本市において校種間連携による算数・数学科の授業研究を、紀南地域では、田辺市等において、英語科の指導方法をテーマとした授業研究を行った。

第1回は、すべてのグループが集合し、授業改善に向けて協同で取組を進めることの意義や、研究の進め方等について研修を実施した。第2回以後は、メンバーの勤務校を会場として、グループごとに日時を設定し、3～8回の協議や授業研究を行った。また、成果を共有する機会として、各グループの取組を発表し交流する場（「きのくに e ラーニング活用モデルメッセ」）を設定した。

以下に、それぞれのグループにおける取組の概要と成果を紹介する。

(1) 校種間連携による授業改善の取組

ア 算数・数学「関数の考え」をテーマにした小・中連携の取組（紀北地域）

① テーマ設定の理由

本グループの構成メンバーは小学校教諭4名と中学校教諭2名であった。本県が実施した平成17年度学力診断テストにおいて、小学校と中学校で共通した課題となっていた「関数についての考え方」をテーマに設定した。また、研究実践を通して、児童生徒が数量関係についての感覚を豊かにすることを目標とした。

② 取組の概要

小学校第3学年から中学校第1学年までの学習内容系統表をもとに、指導手順を系統立てて配置し、各学年で付けたい力を明確にした。その後、教材教具等の工夫について各メンバーがアイデアを出し合い協議を行った。これをもとにメンバーの1名（研究授業の授業者）が、単元計画や学習指導案等を作成し、さらに全員で事前検討を加えた後、授業を実施（図1）した。また他の5名も公開授業を実施し、授業ごとに協議を行った。

研究授業では、ともなって変わる2つの量について理解を深めさせるためグループ学習を取り入れた。児童の各グループが、それぞれ「長方形のたてと横の長さ」「つるしたおもりの重さとゴムの長さ」「火のついた線香の長ささと時間」「くぎの本数と重さ」「バケツに入った水の量と重さ」「たまる水の量と時間」の関係を調べ（図2）、ともなって変わる2つの量の関係についてまとめて発表し交流した。

③ 小・中連携の成果

メンバーからは次の感想を得た。



図1 研究授業の様子

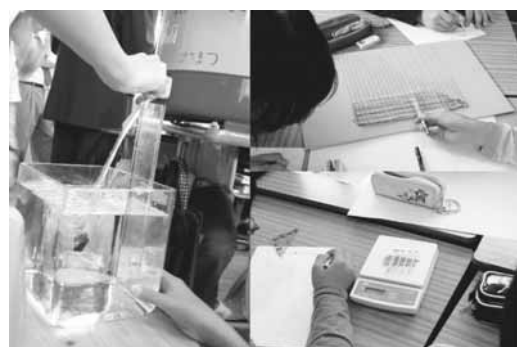


図2 グループ学習の様子

- ・学習内容系統図をみていく中で、小学校から中学校への内容のつながりや、それぞれの学年における内容の意味がよくわかった。
- ・小・中学校で交流することにより、授業の工夫や課題提示方法の相違がよく分かり、今後の授業づくりの参考になった。
- ・校種をこえた授業研究を行うことができたので、子どもたちのつまずきのポイントや各学年で付けなければならない力（確かな学力）がよく分かった。
- ・この取組によって学び合うことのできる人間関係を築くことができ、情報交換の幅が広がった。

等である。

きのくにeラーニングシステム等を活用し、指導事例や指導教材教具等の交流を行った今回の取組は、小学校から中学校に至る指導内容の系統性を考慮した授業づくりができるようになったり、教材・教具に関する知識が増加したりと意義があった。

膝を突き合わせて学習指導案の検討や協議（図3）をする機会が設けられたことで同僚意識が形成され、相談し合う意義を互いに意識できたことも成果である。



図3 授業後の研究協議の様子

イ 数学「二次関数の学習指導」をテーマとした中・高連携の取組（紀北地域）

①テーマ設定の理由

高等学校では、中学校での学習内容を踏まえ、より高度な学習が展開される。しかしながら、中学校での学習内容を十分に理解できていない生徒や、理解していたとしても高等学校の授業で十分に活用するまでには至らない生徒もいる。

二次関数は中学校から高等学校にかけて学ぶ内容であり、中・高が連携して教材研究・教材開発を行うテーマとして適している。

中学から高等学校へと繋がりのある授業を実現することで、学習の定着と応用力の向上を図ることをねらいとした。

②取組の概要 —フリーソフトを利用した授業について—

中・高数学グループは、中学校教諭2名と高等学校教諭3名で構成した。教材作成では、関数教材を手軽に作成できるフリーソフト「グレイプス」を用いた。関数の値の変化が考察できるよう、また、グラフを活用することの良さが分かるように、グラフの変化を視覚化する授業づくりに取り組んだ。

さらに、グラフの変化の視覚化により、高等学校における二次関数の最大・最小や二次不等式等、次のステップの理解に反映させる効果も考慮した。

学習指導案はそれぞれが作成し、検証授業を実施した。また、授業アンケートを実施して、検証授業とアンケート結果を基に研究協議を行った。

③中・高連携の成果

関数教材作成ソフトを用いることで関数を視覚的にとらえさせたことは、生徒の

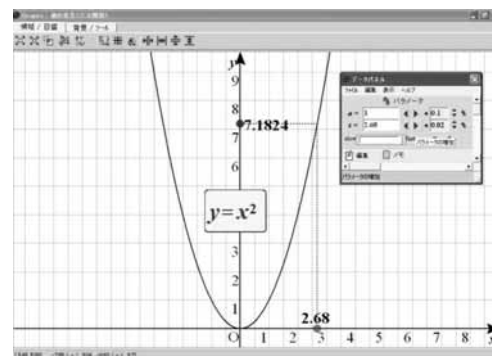


図4 グレイプスで表示した二次関数のグラフ

イメージ形成に繋がったと思われる。アンケートで「分かりやすかった」と答えた生徒が多かったことや、授業後の調査結果でもこの単元の正答率が高かったことから、効果があったと考えられる。

関数の単元においては、視覚に訴える教材づくりの可能性を探究するとともに、学習形態や中学校の学習を高等学校へスムーズに繋ぐ手法についても研究する必要がある。

今まで、中学校と高等学校間における情報交換が大切であると感じながらも、そのような機会は無かった。数学は理論の構築力を育成する教科であり、この力の伸長には系統性のある指導が不可欠である。中学校の教員が高等学校の授業を知ること、中学校として何をやっておかねばならないかが考えられるようになるとともに、高等学校においても、どこに留意して指導する必要があるかが考えられるようになったところに意義がある。

取組のまとめを協議する場面では、グループの教員から、今後も中学校教員と高等学校教員が協力し、系統性を重視した学習指導案の作成を行いたいという意見が出ていたことも成果である。

(2) 共通テーマに基づく授業改善の取組

ア 中学英語「振り返りシート (SFG (Sheets For Goals))」作成の取組 (紀南地域)

① テーマ設定の理由

平成 17 年度学力診断テストによる中学生の英語学力の分析結果によると、「聞くこと」については全学年において概ね良好であり、「読むこと」については、第 3 学年を除いて概ね良好となっている。一方、「書くこと」については全学年で設定正答率を下回り、概ね良好とは言えない状況である。

紀南地域の中学生についても同様の傾向が見て取れた。グループでこの原因について協議し、授業においてコミュニケーションが重視される一方で、書く活動や文法学習の時間が減少したこと等により、文法に関する知識・理解の定着が図りにくくなったのではないかと考えた。

そこで、生徒個人が自分のペースで取り組むことのできる「振り返りシート」を作成し、限られた授業時間の中で文法力の強化と書く力の向上を図ろうと考えた。また、表現力、コミュニケーション力の育成も考慮し、シート中には必ず会話文を取入れることとした。

<p>SFG(Sheets for Goals)</p> <p>① be 動詞現在形 現在進行形</p> <p>START</p> <p>1. is, am, are のどれかを書きなさい。</p> <p>(1) I _____ a student.</p> <p>(2) This _____ my pen.</p> <p>(3) Mika and I _____ good friends.</p> <p>⇒</p> <p>2. 次の文を疑問文と否定文に書きかえなさい。</p> <p>She is an English teacher.</p> <p>① _____ ?</p> <p>② _____ ?</p> <p>⇒</p> <p>3. 次の発問に英語で答えなさい。</p> <p>(1) Is this his bag?</p> <p>Yes, _____</p> <p>(2) Is your school new?</p> <p>No, _____</p> <p>(3) Are you and your friend students?</p> <p>Yes, _____</p> <p>⇒</p> <p>4. 次の日本語を英語にしなさい。</p> <p>(1) わたしは日本人出身です。</p> <p>(2) あれはあなたの自転車ですか。</p> <p>(3) 私たちは忙しくありません。</p> <p>⇒</p> <p>GOAL</p> <p>5. 先生の質問に英語で答えましょう。</p>	<p>① be 動詞現在形</p> <p>② be 動詞過去形</p> <p>③ 一般動詞現在形</p> <p>④ 一般動詞三人称単数</p> <p>⑤ 一般動詞過去形</p> <p>⑥ be 動詞・一般動詞を混ぜたものの平叙文</p> <p>⑦ be 動詞・一般動詞を混ぜたものの疑問文</p> <p>⑧ 疑問詞</p> <p>⑨ 助動詞</p> <p>⑩ 進行形</p> <p>⑪ 命令文</p> <p>⑫ 名詞 (曜日・月・人称代名詞・複数形, 動詞を名詞に)</p>
---	---

図 5 振り返りシート (SFG) の例と内容

②取組の概要 —「振り返りシート（SFG）」の内容と活用の実際—

今回、授業を実施する対象を中学校第2学年とし、第1学年で学習する内容を一通り復習できるよう12の項目（図5）に分けて「振り返りシート」を作成した。また、どの生徒も抵抗なく取り組めるよう基本的な内容を主とした。

完成したシートを「きのくにeラーニングシステム」にアップロードし、登録者であれば誰もが利用できるようにした。なお、このシートは一般的なワープロソフトで作成されているため、ダウンロードすれば使用目的に合わせて改良することが可能である。

実際の授業では、導入時等において、次の方法で活用を試みた。

- ・生徒が班内で教え合う方法
- ・完成したシートを指導者の所へ持って来させて点検する方法
- ・指導者が机間指導をしながら点検する方法

このシートについて生徒の反応は「次々に挑戦していくことで、達成感を得ることができる」「基本的な問題から始まっているので、抵抗なく取り組むことができる」等好評であった。教員からは「このシートを仲介にして生徒と個別対応することができ、生徒を個人レベルで理解しやすくなった」等の感想があげられた。一方、課題として、シートを活用する時間確保が難しいこと等が挙げられた。また、「このシートを活用したことで明らかになった生徒の課題に、指導者としてどう対応できるか」という新たなテーマも提起された。



図6 「振り返りシート」を使った授業の様子

③取組のまとめと成果

本グループのメンバー構成は、ベテラン教員から若手教員と世代が多様である。若手教員にとってはベテラン教員から学ぶ良い機会となった。また、グループのメンバーが所属する学校の規模も大・中・小規模校が含まれ、規模における実施方法を研究するうえでも好都合であった。

今回作成したようなシートは、既製品としても存在する。しかし、あえて自作することで、より自分たちのニーズに合ったものが作成できたと考えられる。本グループでは、今回の第2学年対象のシート作成に続いて、今後第1・3学年用のシート開発や、ALTとの授業で活用する工夫についても共同研究を続けたいと考えている。

イ 高等学校英語「和訳先渡し授業」の研究（紀南地域）

①テーマ設定の理由

高等学校では、学科やコースごとに多様な英語科のカリキュラムが編成されているため、学校間で課題を共有することは容易でない。しかし、学校ごとに多少の違いはあっても、基礎的・実践的コミュニケーション能力の育成を重視した授業づくりが求められていることには変わりはない。本グループでは、各校で共通して実施されているReadingの授業の改善に焦点を当て、訳読を行わない「和訳先渡し授業」をテーマとして、この授業法の実践と長所及び課題を明らかにする研究を行うこととした。

②取組の概要

Readingの授業では、主に新出単語・熟語等や新しい文法事項、書かれた国の文化や歴史的背景等を学習しながら英文の内容を理解していく。通常の授業では、生徒が英文内容を即座に理解できないことを前提とするため、「英文を日本語に直す」ということに力点が置かれる。

一方、「和訳先渡し授業」においては、日本語訳が与えられることで、生徒は英文の内容を既に理解していることを前提とする。このため、訳読作業に替わって英語を使った能動的な言語活動に時間をかけることが可能になる。この授業法では、生徒の実態に合った言語活動を適切に取り入れることが重要である。



図7 和訳先渡し授業

この授業法の長所や課題をメンバーそれぞれが検証するため、各自が「和訳先渡し授業」を実践した。言語活動についてはメンバーで検討し、表1に示したものをそれぞれが必要に応じて取り入れることとした。また、メンバーの一人が研究授業を実施し、協議を行った。

本授業の長所は、学習進度が速まることによつて生じた時間的余裕の中で、英語を使った言語活動を多く取り入れることができる点である。ほぼ全員が言語活動に加わるため、ほとんどの生徒が英語学習に集中できていた。しかし一方で、指導

表1 和訳先渡し授業における言語活動

語彙学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ワードハント（日本語を言う→英単語を探す） （英語を言う→日本語を探す） ・インフォメーションギャップを用いた読み合わせ（ペアワーク） ・単語テスト
内容把握	<ul style="list-style-type: none"> ・センテンスハント（日本語を言う→英文を探す） （英語を言う→日本語を探す） ・英文探し （日本語を順不同に並べ替えて英文とあわせる） ・段落ごとの要約文作り〔日本語で〕〔英語で〕 ・True or False

者や生徒にとって、この授業法によって本当に英語力の向上につながるのかといった不安が残っている。和訳自体が英語学習の大切な要素であるにとらえられているからである。本年度の研究段階では、訳読式の授業と「和訳先渡し授業」とではどちらが優れているかについての結論は出ておらず、今後、英語の定着率にどのような差が出るかを中心に、さらに研究を続ける必要があるというのが本グループの結論である。

③取組のまとめと成果

グループのメンバーは同世代が多かったこともあり、今回の取組を通して学び合いによる同僚意識が高まった。

新しい手法で取り組むためには、周到的な準備が必要となる。共同で取り組む仲間がいることで、研究を開始するエネルギーが産み出されるとともに、準備物や想定される課題が確かめられた。この「和訳先渡し授業」法については、まだまだ授業内容を考える余地が残されており、研究が継続される予定である。

3 きのかにeラーニング活用カリキュラム開発研修講座

本研修講座では、カリキュラム開発推進事業の一環として当センター学びの丘の施

設・設備を活用し、各モデル校の教員がモデル授業の開発に取り組んだ。成果発表を含めて4回の講座を設定して実施した。参加した教員はきのくにeラーニングシステム等で情報交換を行ったり、集合研修に参加したりしながら研究に取り組んだ。

平成17年度は、協力校から2～3名の教員が研究グループに加わり、6校がモデル授業を行った。これらのモデル授業の概要と成果及び課題については、理科に係る事例を中心として既に報告した（『和歌山県教育センター研究紀要』研究開発課(2005)）。

平成18年度は、県立及び市町村立の学校、計7校から数名の教員が参加しモデル授業を行った。校種別では、小学校4校、高等学校2校、養護学校1校、教科領域別では、理科3校、総合的な学習の時間3校、情報1校がモデル授業を行った。本年度は、児童生徒の課題により即した授業づくりをすることを重視し、モデル授業を実施する学校の教員がチームを組んで研究にあたることとした。7校の教員が集合する講座では、相互の取組の概要や進捗状況を交流し協議する機会を設け、協働でより充実したモデル授業開発を目指せるよう配慮した。

本年度実施したモデル授業の概要を表2に示す。

表2 平成18年度きのくにeラーニング活用カリキュラム開発研修講座で実施したモデル授業の概要

校種学年人数・単元等	モデル授業の概要
小学校第6学年(41名) 理科「大地をさぐる」 情報実習室	白浜町の海岸で、グループごとに地層や断層等を観察した。その後当センター学びの丘に移動し、発表作成ソフトを用いて観察結果をまとめ、発表会を行なった。最後に、専門家から発表内容についてアドバイスを受けた。
小学校第5学年(19名) 理科「生物と環境」 双眼実体顕微鏡、 電子顕微鏡	顕微鏡観察を通して、昆虫がそれぞれの生活環境に応じた体の特徴をもっていることに気付かせることを目標とした授業である。双眼実体顕微鏡でアリとハチの脚を観察し、気付いたことを発表し合った。最後に、電子顕微鏡で拡大像を観察した。
小学校第6学年(105名) 総合的な学習の時間 「ロボット実験授業」ほか 双眼実体顕微鏡、電子顕微鏡	実験用手作りロボットを活用した総合的な学習の時間と併せて、秋の花や「ひつつきむし」を題材とした電子顕微鏡や双眼実体顕微鏡による観察、プラネタリウムを活用した秋・冬の星座をテーマとした理科学習を実施した。
小学校第5学年(74名) 総合的な学習の時間 「地域の偉人を調べよう」 双眼実体顕微鏡、 プラネタリウム	郷土の偉人「南方熊楠」をテーマにした学習の一環である。粘菌がどのような生物かを予想した後、「熊楠になって粘菌を観察しよう」をテーマとして、生きている粘菌の原形質流動を観察し、予想と観察結果を比べて気付いたことや感想をまとめた。この後、白浜町の南方熊楠記念館の見学を行った。
高等学校定時制 第1・2・3学年(31名) 理科・理科総合Bなど 電子顕微鏡、光学顕微鏡 プラネタリウム、天体望遠鏡など	身近な生物の器官に見られる微細構造や細胞について、グループごとにデジタルを含む双眼実体顕微鏡での観察・計測と、電子顕微鏡による表面構造の観察を行った。また、プラネタリウムで秋の星空について学習した後、屋上で天体望遠鏡や双眼鏡を用いて天体観測を実施した。
高等学校第2学年(94名) 情報に関する授業 情報実習室、 LAN実習室など	3つのコース別に専門の外部講師を招き、1日日程で、専門的な実習等を含む学習を行った。初級システムアドミニストレータ試験等に向けての専門知識や技能の習得とともに、資格取得への意欲を高めることを目的とした実践である。
養護学校高等部(18名) 総合的な学習の時間 「Big-U探検」 共有スペース、 プラネタリウム	Big-Uの共用スペースを活動場所として、出題されたクイズに回答することを通して、生徒に公共施設を利用する力を育てることを目的とした授業である。後半は、プラネタリウムで星空の学習と、1年間の学習の記録をドームスクリーンに投影し振り返らせることによって生徒相互の交流を深めた。

モデル授業開発の一例を図8に示す。この事例は、地層に関する野外観察指導経験の少ない教員による取組である。地層観察の指導は理科を専門とする教員であっても苦手とすることが多い。この要因として、指導経験が少ないことや指導に当たって必要となる地域の地学的特性の理解が十分でないことがあげられる。今回は授業実施までに、地域の地質や専門的な観察技能等に関する研修の機会を3回別途設定した。また、野外観察後の指導方法に関する助言や指導資料作成の支援も併せて行った。

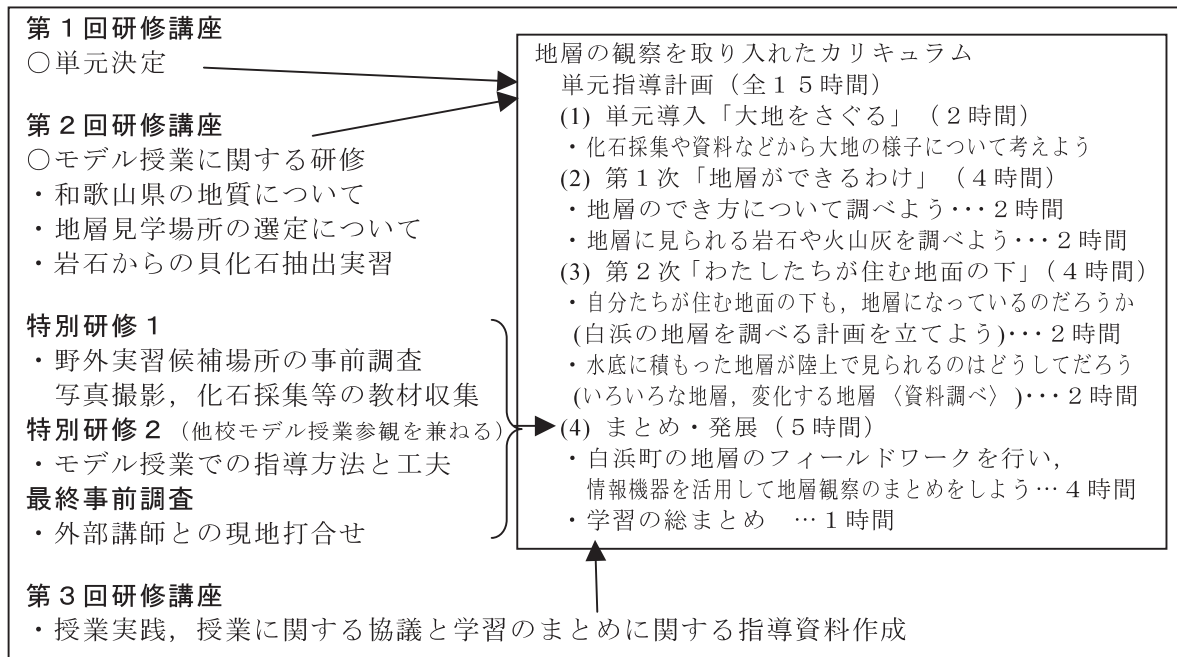


図8 小学校6年理科「土地のつくり」に関するモデル授業開発の一例

この教員は、モデル授業に取り組んだ成果として、主に次の2点を指摘した。1つは、自分が苦手とする内容領域に係る1時間の授業づくりに取り組むことが、単元全体の指導計画やそれに伴う教材研究に波及したということである。校外学習を核として、指導過程を工夫して構成する力を磨くことにつながったと言える。また同時に、地域の地学に関する資料が蓄積できたり、地層観察や化石採集等の技能を身につけたりすることもできたようである。2つめとして、当センター学びの丘指導主事や県立博物館学芸員からの助言、協力を得る機会ができたことである。総合的な学習の時間を中心とし、理科や社会の授業においても、専門家等の授業協力や助言を要請について必要性を感じている教員は多いであろう。モデル授業等の機会は、よい契機である。

一方、課題としては、このような支援の機会がなければ野外実習を含む授業づくりを行うことが難しいことや、取組に多くの時間を要したことが挙げられた。しかし、研修の機会が設定されさえすれば、教員にとって、また学校全体としても、その成果を活用し広げるという意味で、非常に有効な取組になり得ると言える。

理科機器や情報機器を活用する授業に取り組んだ高等学校教員は、モデル授業を学校の特色ある取組として関連付けを図った。彼らからは、「1回きりで終わらせず、年間指導計画に位置付けていきたい」という感想を得ている。児童生徒にとっては1日を要して行う学習になるからこそ、また、教員にとっても多くの時間をかけて開発する授業であるからこそ、単元全体あるいは年間指導計画での位置づけを見据えて、相応の成果を挙げることができる取組にしたいという意識を喚起できた。

2年間で、14例のモデル授業を開発することができた。この成果は、カリキュラムセ

ンター機能・環境学習情報センター機能活用の事例としてパンフレットに集約した。今後これらの成果を活用した授業への支援を通して、各学校が特色あるカリキュラムづくりや授業改善に取り組む契機としたい。

4 考察

紀北地域におけるF C研修講座では、小・中・高の教員が連携して教科指導を系統的に進める研究を行った。校種間連携による取組は、授業改善の新たな視点として有効である。算数・数学においては、系統性ある指導が重要であることはどの教員も分かっていたが、これまでは校種を越えて教材研究を行う機会が少なかった。特に、中学校と高等学校が共同で研究に取り組む機会が設けられることは少なかった。今回、算数・数学科の指導内容を系統的にとらえたことによって、各学年の指導内容が全体の中でどのような意味を持つのか、あるいは各学年で付けなければならない力は何なのかを明確にすることができた。このことによって、より適切な指導方法や使用する教材教具を展開できる可能性が示された。

紀南地域におけるF C研修講座では、各グループで設定したテーマに基づいて授業改善のための具体策を研究した。1時間の授業の学習指導案作成を主目的とするのではなく、毎時間の授業におけるワークシート活用や授業方法そのものをテーマとしたことで、長期にわたって継続して取り組むことができた。また、互いの授業実践を持ち寄って協議する機会が必然的に多くなり、同僚意識の高揚につながった。研究は本年度の取組で十分に完成したわけではないため、各グループとも研究の継続が必要であると認識している。今回の研究を契機として、今後は自主的に研究が継続されることを期待する。

F C研修講座は、原則として市町村単位で実施したため、放課後等を利用してグループの研究の進捗状況に応じて実施することができた。結果として、十分な協議時間を確保できたとともに、良好な協力関係を築くことができ、指導方法の核心に踏み込んだ有意義な話し合いを進めることができた。また、その地域の共通課題を見つけることで、まとまった活動を設定しやすいというメリットがあった。

本年度のカリキュラム開発推進事業では、各校の教員が協働で授業づくりを行った。これらの取組は、指導過程を工夫してカリキュラムを構成したり、専門家等と連携を図ったりするうえで有効であった。本講座で実施したモデル授業において、施設・設備の活用を通して授業を支援することで、教員の授業力の向上を図ることができた。平成17・18年度に実施したモデル授業の成果を広報し、今後も当センター学びの丘の施設・設備を活用した授業づくりの支援を実施することになっている。

講義による研修講座のみではなく、教員の授業力向上を図るうえで、本報告で紹介したOJT形式の教員研修の必要性は今後ますます必要性が増すと考えられる。以下に、F C研修講座及びカリキュラム開発推進事業の実施を通して明らかになった、OJT形式の教員研修を実施するうえでの指針を示す。

- ・近隣地域の教員による5～10名程度のグループ研究とする。
- ・必要に応じて回数や内容を設定して実施する。
- ・参加者自身が共通の課題を設定する。(あらかじめ課題を提示する場合もある。)
- ・1時間の授業研究ではなく、指導方法や単元指導計画やのカリキュラム開発をテーマとする。
- ・異校種連携を奨励する。

これらの教員研修で得られた成果や課題については、グループ内で完結させずグルー

ブ間や本県の教員に向けて普及することが重要である。例えば、成果発表や交流の機会（「きのくに eラーニング活用モデルメッセ」）を設けるとともに、開発した学習指導案や教材をきのくに eラーニングシステム等に公表するのである。

OJT 形式の教員研修を契機として、教員がそれぞれの課題に応じて自発的に自己研修を行うことを活性化させるよう、当センター学びの丘として意図的・組織的に取り組んでいく必要がある。

本年度は、2地域において算数・数学科と英語科の取組を行った。今後、他教科等で多様なテーマについて研究していくうえで、以下の課題がある。

- ・研修を実施する教員グループを組織するにあたって、市町村教育委員会や県立学校課との連携が重要である。
- ・当センター学びの丘における支援体制を強化する。
- ・研究の推進にあたってリーダーの教員が必要である。

5 おわりに

近年、教育に様々な改革が求められる時代にあつて、教員に求められる知識や技術は多岐にわたっている。もはや、意識が高く力量のある教員といえども、個人の経験や知識だけで対応することが難しい状況と言わざるを得ない。学校組織全体で、また地域の人材や専門家等との多様なコミュニケーションを通じた指導力の向上が求められる。ところが、しばしば「教員の世界は閉鎖的だ」と指摘されるように、同じ学校に勤務する教員同士ですら、深まりのある授業づくりの議論がなされる機会が少なくなっている。多忙な中で、相手の仕事内容にまで踏み込む余裕がない、あるいは踏み込まないといった状況も見られる。教員が閉鎖的であるということは、指導力を向上させる磨き合いが少ないことに他ならない。指導方法等について助言をしてくれる先輩や仲間ができにくく、授業力を高めるための相談相手を見つけられない状況もある。

本県では小規模校が多くなっている。このことは、校内での「教員の学び合い」が難しいことを意味する。教員の指導力向上に F C 研修講座のような OJT 形式の教員研修が有効であろう。

今回の「学び合い」の取組は、2つの役割を果たしたと思われる。一つは、各教員のもつ情報量を増加させたことである。複数の教員が協議し情報交換をすることで、指導法や教材教具等に関する情報量を格段に増加させることができた。もう一つは、同僚意識の構築である。取組を通して教科の専門的な内容とともに、悩みをも打ち明け合い、分かち合う仲間づくりができた。このことは、教員生活を送るうえで安定した力を発揮できる支えとなったであろう。授業力の向上とともに、教師の総合的な力量の向上につながるものである。

<参考文献>

- ・和歌山県教育センター学びの丘研究開発課「理科教育研修とカリキュラム開発事業」『和歌山県教育センター学びの丘研究紀要』pp1-12(2005)
- ・和歌山県教育委員会『平成 17 年度学力診断テスト報告』（2005）